



青山 清道 AOYAMA, Kiyomichi

新潟大学を退任するにあたり 若者に伝えたいこと

「少年ケニア」の発売日が待ち遠しかった。山川惣治の小説で、アフリカの奥地で象やライオンが躍動する姿、未知の世界への憧れ、冒険に対する熱気にあふれていた。戦後の長岡市で、焼け跡に建てられたバラック校舎の小学校で学んだ私にとって何よりの楽しみだった。中学校ではルイ・エモン著「白き処女地」を愛読した。17世紀に新天地カナダに移住、ケベック地方に定住したフランス農民の物語である。自然の美しさと厳しさが実に生き生きと描かれている。

いつか機会があったら、広大で奥深いアフリカやカナダの自然に触れてみたいという希望をもち続けて勉学に励み、昭和42年、新潟大学工学部に赴任した。

周囲の先生方のご協力をえて、昭和43年から約2年半、JICAの派遣専門家としてナイジェリア連邦共和国、国立ヤバ工科大学の客員講師として、土木工学科の教育や地盤災害調査にあたった。昭和55年から約1年、文部省在外研究員としてカナダ、マギル大学で雪氷工学の研究に従事することができた。



ガーナ医科大学の中庭で野口英世の胸像と(昭和44年)本人は中央

これらの経験を生かし、帰国後は留学生と交わるなかで、多文化共生社会の実現に向け微力を注いできた。“Where there is a will, there is a way”は、私の好きな言葉です。人類の明日を脅かす森林破壊や砂漠化等、環境問題が地球規模で表面化しており、いま日本が求められているのはグローバルな視点からの国際協力です。

“失敗を恐れずに夢に向かって思い切って挑戦してほしい”、学部、大学院時代は多くの試練に立ち向かう大切な準備期間です。

最後に、在職中にご指導、ご支援を賜った教職員、学生の皆様に感謝したいと思います。長い間、ありがとうございました。



ヤバ工科大学で講義(昭和44年)

全学講義開講

学生の総合的な知見を高めるため、学外から講師を招いて行っている全学講義。平成19年度に行われた「教師の力・教育の力」と「21世紀を生きる学びとは何か」を紹介します。

全学講義:1

「教師の力・教育の力」

●2007年12月6日(木)16時45分～19時30分 ●総合教育研究棟G410講義室

- 講師・演題 植村 鞆音(平成19年度日本エッセイスト・クラブ賞受賞)………「『歴史の教師・植村清二』を語る」
- 長谷川 義明(新潟愛郷会理事長)………「教育の力、教師の力」
- 鈴木 光太郎(新潟大学人文学部教授)………「旧制新潟高校教授・黒田亮先生のご業績」

社会的責任と教育効果の向上を目指して授業改善や教育改革の続く中で、ともすると「組織」や「制度」の改革、あるいは「教育技術」の向上に目を奪われがちになってはいないか、と、気付いたのが、この全学講義を企画したきっかけであった。もとより、授業の成果を計算しようという評価体制にあっては、学生が教師に接する中で、何かしかの感化を受け、自らの資質に気付かされたり、教師の姿に言葉では伝えることの出来ない何かを感じ取ったりするという、測ることの出来ない「教師の力」は捨象されてしまいがちである。かといって、Face To Faceの場で、教える内容や技術とは別に、学生に知的な触発、あるいは人生を生きるうえでの動機付けがなされるところに「教師の力」を見定めるなら、今日の大学の教員にあっては、そうした力、ある意味では人間性などは忘れられがちであるし、また学生にとっても、教師に接する機会と場がいかに限られているのが現状である。いや、学生と教員との間に人間的な交流を図ることなど難しいというのが、今では実情かもしれない。

しかし、自学自習や映像を通して学生の教育にあたるのではなく、生の人間としての教師が学生の前に自らの姿を晒して何がしかを語ることによって授業を行なう以上、「組織」や「制度」の改革もさることながら、

教員の「人間」としての力も問われることになるのではないか、そのような発想から、この全学講義は企画・立案された。

折りしも、1960年代に本学の人文学部長をお務めにもなった植村清二先生の教師としての生き方を、ご子息の植村鞆音先生が描いた評伝、『歴史の教師 植村清二』(中央公論新社)が刊行され、2007年度の第55回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞された。そこでこれを機会に、今日、忘れられがちな「教師の力・教育の力」について考える機縁に出来ればと考えて、全学講義を実施することを思い立った次第である。



旧制新潟高校正面の映像と鈴木光太郎教授

実施にあたっては、植村頼音先生のお話しを中心に据えるとともに、これとは別に、旧制新潟高校教授で、実験心理学の端緒を開いた黒田亮先生のご業績を発掘した鈴木光太郎・人文学部教授から、植村先生の話に先立って、黒田先生のお仕事の意義をお話していただき、最後に、前新潟市長、その後は新潟大学の監事として大学運営にご尽力下さった、新潟愛郷会理事長の長谷川義明先生から、総括的なお話しを賜るとい

う形で、立体的にテーマを際立たせることが出来るように、と考えた。こうして人文学部附置地域文化連携センターの主催、人文学部の共催で、2007年12月6日(木)の16時45分から19時30分にかけて、市民公開の形で、総合教育研究棟G410教室で「教師の力・教育の力」と題された全学講義が実施された。

鈴木光太郎先生からは、新潟大学の前身の新潟高校でなされた黒田先生の先進的な研究について明らかにされ、大学の知的伝統を実感することができた。植村先生のお話からは、広い視野と深い識見を持ってこそ、些事に「頓着」せずに自らの信じる道を生きることが出来ることを教わった。長谷川先生からは、教師の与える感動は、接した人の生涯に生き続けることを改めて認識させられ、教師の人間としての力の重要性に思いを新たにするのできた全学講義であった。物心両面のご支援を頂いた教務課と、全学講義枠を譲って下さった歯学部にて改めて謝意を表する次第であります。



前新潟市長の長谷川義明先生

全学講義:2

「21世紀を生きる学びとは何か」

●2007年12月21日(金) 14時40分～16時10分 ●教育人間科学部大講義室

●講師 佐藤 学 (東京大学大学院教育学研究科教授)

21世紀は教育が社会をリードする時代である。それは、モノの生産と消費が市場の中心であった産業主義社会から、知識・情報・対人サービスが市場の中心となるポスト産業主義社会へ移行し、知識が高度化、複合化、流動化する高度知識社会となるためである。そのため、「基礎的知識・技能・態度」の教育から、「高度の知識を活用する能力」「創造的思考力」

「コミュニケーション能力」すなわち「PISA型学力」の教育への変容が必要となる。

2000年以降に実施された3回のPISA調査(OECD国際学力調査)において、日本の子どもの学力低下は顕著となり、トップレベルから転落したのはなぜか。かつて日本政府は高い志をもって教育に投資したが、現在の教育投資はOECD加

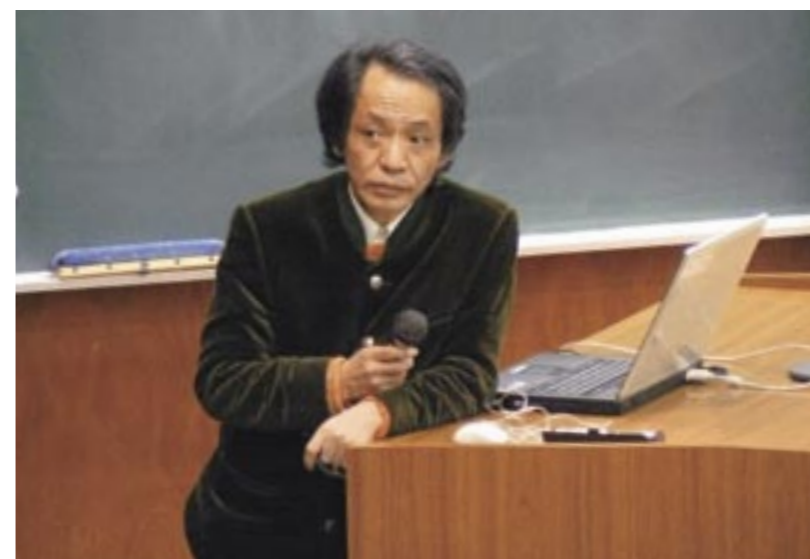
盟30カ国のうち27位に落ち、それとともに教科書の質も教師の質も落ちている。受験と競争の東アジア型教育が破綻し、少数の学ぶことの好きな子と、多数の嫌いな子に分かれ、今や世界で最も勉強しない子どもになってしまっている。6割の子が本を読まないといわれ、多くの子どもにとって学校は挫折する場になっている。「学びからの逃走による学力危機」と言える。

「授業時間の増加」や「関心意欲の回復」は学力低下に対し、全く解決策にならない。授業時間が少ない国ほど学力が高く、関心意欲は経済や社会のあり方に深く関わり、途上国において高い傾向があるのである。21世紀においては単純労働が激減し、専門的知識の市場が拡大するので、仕事を確保するためには何らかの専門家であることがきわめて重要になる。それゆえ、教育の重点が「量」から「質」に変わってゆく必要がある。求められる学力が、「基礎的な知識・技能」から「高次の思考による問題解決」と「コミュニケーション」の能力に変わるからである。ゆとり教育でも基礎学力重視でもなく、受験競争の弊害を除き、「高いレベルの教育をすべての子ども達に」を目標にする必要がある。PISA型学力が1位となったフィ

ンランドは、質と平等を高めることを教育の目標として、29歳までに9割が高等教育を受ける。また、スイスでは、大人として自立する年齢を30歳として、30歳まで教育する。

「勉強」から「学び」への転換が重要である。「勉強」は座学、個人、習得・定着を特徴とするのに対し、「学び」は活動的、協同的、表現と共有を特徴とする。「勉強」は何ものとも出会わないが、「学び」はモノ、他者、自己あるいは文化などさまざまなものとの対話的实践である。「学びの作法」として、3つのC、Care(心砕き、配慮)、Concern(関わり、知的関心)、Connection(繋がり、知識<意味>の繋がり)が重要である。聴き合う関係からスタートし、学び合う関係へ発展させる。蟻の目(具体的思考)とトンボの目(複眼的思考、批判的思考)と鳥の目(俯瞰的思考)を統合する。現実、書物、他者、先達から学ぶ。

21世紀は、その社会を生きる人々の知的叡智が問われる時代である。複雑な問題を協同で探求し解決する能力が求められている。自分が「引き受ける問題」を生涯の学びの中軸に据えてほしい。学び続ける限り、希望は生まれてくる。



「勉強」から「学び」へ切り替える必要性を語る佐藤学教授